

[特集：東日本大震災]

## 東日本大震災における新潟医療福祉大学学生 によるボランティア活動の実際と今後の課題 ～新潟市北区避難所における学生ボランティア活動を通して～

新潟医療福祉大学副学長（地域連携担当） 丸 田 秋 男

### I. はじめに

本学は、「優れたQOLサポーターの育成」という建学の理念の下で、学生と教員の協働による地域貢献を大学教育の重点目標にしている。また、学生と教員の協働による地域貢献のための仕組みとしては、平成22年3月に本学が所在する新潟市北区と包括連携協定を締結し、学生による主体的な活動を織り込んだ推進体制を整えている（図1）。

3月11日に発生した「東日本大震災」に対する学生ボランティアの活動は、このような仕組みを背景にして、新潟市北区に設置された避難所において平成23年3月23日から同年8月22日まで5か月間にわたって継続することができた。

本稿では、まず、本学におけるボランティア教育と、平成16年10月23日に発生した「新潟県中越地震」及び平成19年7月16日に発生した「新潟県中越沖地震」における学生ボランティアの活動等を概観する。

次いで、「東日本大震災」における新潟市北区避難所（以下「避難所」という。）での5か月間にわたる本学の学生ボランティアの活動の実際を明らかにした上で、今後の課題について論ずる。

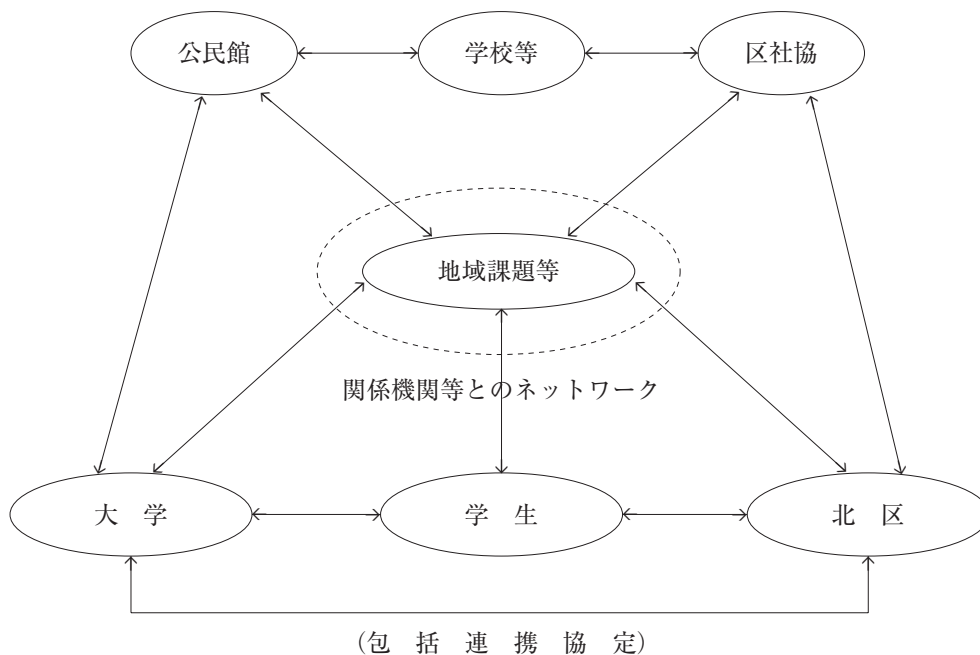


図1 学生と教員による地域貢献の推進体制

### II. 本学におけるボランティア教育

本学におけるボランティア教育は、平成13年の開学以来11年目を迎える。授業科目は、「ボランティアの世界」（1年次・1単位・選択）<sup>1)</sup>であり、全学科を対象とした初年次教育として「保健医療福祉基礎科目群」に位置づけられている。

授業の目標は、本学の建学の理念である「優れたQOLサポーター」を目指す学生にとってのボランティア活動の意義を理解し、自ら主体的にボランティア活動に取り組むことのできる力量形成を図ることにある。

新カリキュラム移行後の履修登録者の状況は表1に示すとおりであるが、教室の座席数の関係で履修登録者の上限が330人とされているため、入学定員の増加により学生数に占める割合は減少している。

なお、他大学に見られるようなボランティア活動をポイント化し、そのポイントによって単位を付与する制度は採っていない。

また、学生によるボランティア団体としては、平成17年に学生の運営による「学生ボランティアセンター」が設立され、ボランティア依頼の受付、ボランティアの募集、学生とボランティア先とのコーディネート等を行っている<sup>2)</sup>。

表1 ボランティアの世界の履修登録者の状況

	履修登録者数	学生数	割合	授業評価
平成21年	323人	650人	49.7%	4.52
平成22年	324人	760人	42.6%	4.47
平成23年	330人	871人	37.9%	4.50

注) 授業評価は、5点評価である。

### Ⅲ. 本学における災害時の学生ボランティア活動の概要

本学における災害時の学生ボランティアの活動としては、平成16年7月13日に発生した新潟県中越地方の集中豪雨（以下「7.13水害」という。）、平成16年10月23日に発生した新潟県中越地震（以下「中越地震」という。）及び平成19年7月16日に発生した新潟県中越沖地震（以下「中越沖地震」という。）がある。

7.13水害では、三条市・見附市・中之島町を中心に集中豪雨と堤防決壊による河川氾濫により発生した大規模な水害の復旧に向けて、9日間にわたって延べ355人の学生が、ゴミ搬出、家具搬出、清掃、窓拭き等の活動を行った。

3か月後に発生した中越地震では、23日間にわたって延べ59人の学生が新潟県災害ボランティア本部において災害情報やボランティア情報に関する窓口対応等を行ったほか、1年間にわたって延べ178人の学生が知的障害者更生施設（新潟県コロニーにいがた白岩の里、新潟県あけぼの園）において被災した障害者の生活支援及び精神面のケアに当たる活動を行った。

また、3年後に発生した中越沖地震では、31日間にわたって延べ112人の学生が柏崎市及び刈羽村において被災者の生活支援等の活動を行った。

これらの活動の基本は、①自治体や社会福祉協議会等の要請に基づいていること ②学生の主体的な活動であること ③大学が学生の交通手段や物資面等での援助を行っていることにあり、このたびの東日本大震災における学生ボランティアの活動にも引き継がれている。

### Ⅳ. 東日本大震災における本学の学生ボランティア活動

#### 1 基本方針

3月14日に学内に設置された「東北関東大震災対策本部」<sup>3)</sup>では、学生の安全確認等を確保できないことから被災地への学生ボランティアの派遣は行わないものとした。

その一方で、新潟県内の避難所への学生ボランティアの派遣は、自治体や関係団体から依頼があった場合は全学的に対応することを基本方針とした<sup>4)</sup>。

また、学生ボランティアの派遣要請の受理、派遣の実施、自治体等との連絡調整は「災害ボランティアセンター」<sup>5)</sup>が担当することとした。

## 2 経 過

- ・ 3月14日 学内に「東北関東大震災対策本部」を設置する。
- ・ 同 日 新潟県、新潟市、新潟県社会福祉協議会、新潟市社会福祉協議会に対して本学の基本方針を伝える。
- ・ 3月18日 新潟市北区の豊栄総合体育館に避難所が設置される。
- ・ 同 日 新潟市北区役所及び新潟市北区社会福祉協議会から学生ボランティアの派遣要請を受ける。
- ・ 3月22日 学内に「災害ボランティアセンター」（センター長：地域連携担当副学長）を設置する。
- ・ 3月23日 避難所への一次（初期）対応として、3月29日まで毎日5人の学生ボランティアの派遣を開始する（レクア、コム部<sup>6)</sup>が対応）。
- ・ 3月23日 全学の学生を対象にして学生ボランティアの募集を開始する。  
学内において希望者に対する説明会を開催する（参加人数：約280人）。
- ・ 3月30日 避難所への二次対応（春季休業中の対応）として、4月10日まで毎日7人の学生ボランティアの派遣を開始する。
- ・ 4月11日 前期の授業開始に伴い学生ボランティアの派遣人数を平日は2人、休日は5人に変更する。
- ・ 6月1日 避難者数の減少等に伴い学生ボランティアの派遣は、土・日曜日のみに縮小する。
- ・ 8月22日 避難所の閉鎖に伴い学生ボランティアの派遣を終了する。

## 3 活動の実際

### 1) 活動場所

新潟市北区避難所「豊栄総合体育館」<sup>7), 8)</sup>

### 2) 活動期間

平成23年3月23日から同年8月22日までの5か月間

### 3) 活動時間

原則として、午前9時から午後4時まで

### 4) 活動内容

- ・ 湯茶の確認
- ・ 配食の手伝い
- ・ 避難所の清掃
- ・ 被災者に対する案内
- ・ 子どもたちとの遊び 等

### 5) 活動方法

当日の活動内容は、避難所のボランティア・コーディネーターの指示によるものとした。また、一日の活動は、学生用「災害ボランティア日誌」に記入し、翌日の学生への引継記録として活用した。服装については、学生ボランティアであることを示す大学指定のジャンパー、大学の腕章及びネームプレートを着用した。

### 6) 活動実績

ボランティア活動を行った学生数は延べ人数353人であり、活動期間別に見てみると表2のようになる。避難所で生活する人や子どもの減少に伴い、学生ボランティアに対するニーズも少なくなる状況であっても、学生の活動は途切れることはなかった。

なお、学生ボランティアの学科別の構成割合を見てみると、社会福祉学科が全体の43.9%と最も多く、次いで、看護学科（18.1%）、理学療法学科（13.9%）の順となっている。

また、学科別の学生数に占める実人数の割合では、社会福祉学科が17.7%と最も多く、次いで、看護学科

表2 学生ボランティアの活動状況

	期 間	活動人数	説 明
第1期	3月23日～3月29日	35人	レクア、コム部による初期活動
第2期	3月30日～4月10日	82人	春季休業中の活動
第3期	4月11日～5月31日	218人	前期授業中の活動
第4期	6月1日～8月22日	18人	土・日曜日のみの活動
全期間合計		353人	

新潟日報2011年4月21日付



(16.9%)、理学療法学科 (12.3%) の順であった (表3)。

7) ボランティア保険

新潟市北区社会福祉協議会に名簿を提出し、全国社会福祉協議会「ボランティア保険」に加入した。

8) 大学のサポート体制

学生ボランティアの登録受付、派遣名簿 (ボランティア保険加入者名簿を兼ねる) の作成、避難所との連絡調整等の事務は「災害ボランティアセンター」が担当した。

また、学生ボランティア用のジャンパー、大学の腕章及びネームプレートは貸与し、飲料水については支給した。なお、貸与又は支給に関する経費は大学の負担とした。

表3 学生ボランティアの学科別の状況

	実人数(a)	学生数(b)	参加率 (a/b×100)	延人数	構成割合
理学療法学科	46人	373人	12.3%	49人	13.9%
作業療法学科	21人	206人	10.2%	28人	7.9%
言語聴覚学科	13人	204人	6.4%	16人	4.5%
義肢装具自立支援学科	1人	201人	0.5%	1人	0.3%
臨床技術学科	2人	99人	2.0%	2人	0.6%
健康栄養学科	18人	176人	10.2%	18人	5.1%
健康スポーツ学科	5人	477人	1.0%	6人	1.7%
看護学科	58人	343人	16.9%	64人	18.1%
社会福祉学科	103人	582人	17.7%	155人	43.9%
医療情報管理学科	10人	204人	4.9%	10人	2.8%
大学院	1人	—	—	4人	1.1%
計	278人	2,865人	9.7%	353人	100.0%

注) 各学科の学生数は、参考値である(平成23年8月1日現在)。

## V. 東日本大震災における本学の学生ボランティア活動の評価

避難所の閉鎖に伴い5か月間にわたる本学の学生ボランティア活動の評価を行った。

評価の方法は、避難所の運営責任者である北区健康福祉課長、避難所におけるボランティアの受付・登録・活動等に関するコーディネート等の業務を統括した北区社会福祉協議会事務局長及び5か月間にわたって継続的にボランティア活動を参加した社会福祉学科の学生2人(4年次)に対してヒアリングを行った。

ヒアリング項目は、①活用できる点 ②改善すべき点 ③避難者への影響 ④社会的な影響 ⑤学生ボランティアに対する満足度 ⑥特記事項の6項目である。

なお、ヒアリング対象者に対してはヒアリングの目的を説明し、その内容を本論文で公表することについて同意を得ている。

ヒアリングによる学生ボランティア活動の評価は表4に要約したとおりであり、北区健康福祉課長並びに北区社会福祉協議会事務局長からは、「十分満足できる」ものであったとの評価を受けた。

特に、「避難所のニーズに応じて5か月にわたって活動が継続されたこと」、「避難者の抱えている不安や困難を感じ取り、その背景にある問題(要因)を考え、学生ボランティアの視点からの気づきを避難所のスタッフに伝えることができたこと」、「避難所の運営方針を理解し、避難者の自立を妨げるような関与をしなかったこと」、「避難者の話に心を傾けて聴くことで、避難者の安心感(心理面)と安定感(生活面)の支えになったこと」、「学生が当たり前のように避難所にいることで、日常のボランティア活動の必要性が広く地域住民や関係者に認識されたこと」などが高く評価された。

その一方で、「あいさつ、衣服や身なり等のマナーの基本ができていない学生がいたこと」、「座学の知識や限られた経験を専門性と混同している学生がいたこと」、「大学内において、学生に対して日々の避難所の運営状況や学生の活動状況等を情報提供する仕組み(掲示板や情報コーナーの設置等)が十分でなかったこと」など、今後の課題とすべき指摘を受けた。

また、避難所で継続的に活動した学生の自己評価では、「(避難者にとっては)子どもや孫のような存在で、(子ども

表4 学生ボランティア活動の評価についてのヒアリング結果の概要

ヒアリング対象者	北区健康福祉課長 (関係機関による外部評価)	北区社会福祉協議会事務局長 (関係団体による外部評価)	学生ボランティア (学生による自己評価)
ヒアリング年月日	平成23年8月23日(火)	平成23年8月23日(火)	平成23年8月25日(木)
ヒアリング場所	北区健康福祉課	北区社会福祉協議会	新潟医療福祉大学
1. 活用できる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難者やスタッフのことを第一に考えることができること。</li> <li>・避難者に対して先入観や予見を持たない公平な態度をとれること。</li> <li>・避難所のニーズに対応して継続的に活動できたこと。</li> </ul> <p>→これらが、大人をはじめ子どもやスタッフの安心感につながった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難者の抱えている不安や困難を感じ取ったこと</li> <li>・その背景にある問題(要因)を考えることができること。</li> <li>・その気づきをスタッフに伝えることができること。</li> </ul> <p>→新潟医療福祉大学の学生の独自性として理解している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難者と直接関わることで先入観(泣いたり落ち込んでいるなど)がなくなったこと。</li> <li>・避難者が一生懸命な体験を話すことを聴くことにより、心を傾けて聴くことの大切さを実感できたこと。</li> <li>・子どもたちにとって大人ではないお兄さん・お姉さんのような学生の存在が大きな意味があること。</li> <li>・避難者が頑張っていたり笑顔を見せてくれることで、学生自身のエンパワーメントになること。</li> </ul>
2. 改善すべき点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生を派遣する大学側のコーディネート機能等に不十分さを感じたこと(ボランティア・コーディネーターの必要性)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生に対する初歩的な教育訓練が必要であること(挨拶ができないう、胸元が見えるような服を着てくるなど)。</li> <li>・一部の学生に、断片的な専門知識で避難所の運営を批判するなどの独自の独善的な面が見られたこと(障害児の生活場所以ついで批判)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初期の活動における失敗体験(子どもに対して感情的に怒るなど)から、その後の活動につながる学生がいたこと。</li> <li>・学生の採る態度等によって子どもたちの態度や生活が大きく左右されたこと。</li> </ul>
3. 避難者への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が避難者の話に心を傾けて聴くことで生活に落ち着きを与えたこと。</li> <li>・たとえ、短時間(短時間)であっても、避難者の生活に直接関わることで、その人の生活の支えになれたこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が避難者の話に心を傾けて聴くことができなくなったこと(「自分の子どもや孫でもできないことをしてあげる」との声)。</li> <li>・避難者の生活面の自立を妨げることしななかったこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動を続けることで避難者の笑顔が変化し(作り笑顔から自然な笑顔へ)、被災時の体験や他の避難所での辛い出来事に心を傾けて聴くことで、避難者の安心感が高まったと実感していること。</li> </ul>
4. 社会的な影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常のボランティア活動の延長として、同じ場所と同じ時間を共に過ごすことが、何よりも避難者の心のケアや精神面のサポートになることが確認できたこと。</li> <li>・心のケアなどとうたわなくてよい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域住民にあって学生ボランティアが避難所にいることが「当たり前」という状況が地域から認識されたこと。</li> <li>・災害時のボランティア活動は特別なものではなく、日常のごく普通のボランティアの延長であるということ共有されたこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が避難所にいることが「当たり前」のこととして受け入れられたこと。</li> <li>・学生であってもスタッフの一員として対等に扱われ、必要な情報と役割を与えられることで、関係機関や地域の信頼感を実感できたこと。</li> </ul>
5. 学生ボランティアに対する満足度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5か月間にわたって避難者の安心感と安定した生活を支えたことに対して十分満足している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体調を崩す学生がいなかったことや避難者とのトラブルがなかったことなどに対して十分満足している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動を続けることで避難者が心を開いてくれたことや、一人の人間として関わりをもてたことに嬉しさや喜びを感じている。</li> </ul>
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境面の配慮としては、畳と布団を準備することとを基準とした。</li> <li>・避難者の生活の場に、関係者(報道機関を含む)の立ち入りを制限した(避難者の尊厳の重視)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア活動のコーディネートに当たっては、避難者一人一人の自立した生活を見据えた支援を行うことを基本とした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専任のボランティア・コーディネーターがいなかったことから、事務局職員が連絡・調整の役割を担う体制を採った。</li> </ul>

たちにとっては）兄や姉のような存在で、同じ場所で同じ時間を共に過ごすことの大切さを学んだ」、「避難者の話を一生懸命に聞くことで心を傾けて聴くことの大切さを体験的に理解できた」、「避難者の笑顔や喜びを通して自らがエンパワメントされることを実感した」などとのプラスの評価とともに、避難者（子どもを含めて）がぶつけてくる感情や行動に戸惑いモチベーションが下がった学生がいたり、思っていた活動ができず不満を表す学生がいたなど、学生側の課題も指摘された。

## Ⅵ. 今後の課題

本学における災害時の学生ボランティア活動の特色は、学生の主体性を尊重しながらも、被災地の状況、自治体等からの要望内容、学生の安全確保及び学事暦（授業日程等）等を考慮し、大学としての基本的な方針を明らかにした上で組織的な対応を採っていることにある。東日本大震災においても同様であり、一次（初期）対応から避難所が閉鎖されるまでの5か月間にわたって学生ボランティア活動を継続した。

その活動実績と評価については上述したとおりである。これらを踏まえ、本学における災害時の学生ボランティア活動をめぐる課題としては、次のようなことが上げられる。

### 1 初年次におけるボランティア教育の充実

本学では、初年次の前期に「ボランティアの世界」（1単位・選択）を配当しているが、教室の座席数の関係から履修者を制限せざるを得ない状況にあり、入学者定員の増加に伴い学生数に占める履修者の割合が減少している<sup>9)</sup>。

このたびの避難所のボランティアにおいても、ボランティアに関する初歩的な教育訓練の必要性が指摘されたように初年次におけるボランティア教育の重要性は高い。

今後については、原則として履修希望者全員が授業を受けることのできるカリキュラム上の配慮を検討する必要がある。

### 2 日常のボランティア活動の推進体制の強化

日常のボランティア活動が、災害時におけるボランティア活動の基本になることや、避難者はもとより関係者や地域から安心され信頼される力量形成に繋がっていることが確認づけられたとあってよい。

本学では、平成17年に学生によって設置・運営する学生ボランティアセンターが設立されたが、ボランティア情報の提供等に止どまっております、学生のボランティア活動の多くは、レクア、コム部や教員による紹介、学生の自主努力等によるものである。

今後については、学生委員会が学生ボランティアセンターを所管し、学友会組織の下で日常のボランティア活動をコーディネートするなどの推進体制の強化について検討する必要がある。

### 3 ボランティア活動を通じた帰納的学習プログラムの導入

本学では、開学以来、学生と教員との協働による地域貢献を推進しており、ボランティア活動は地域貢献を推進する上での基本となる方法である。地域でのボランティア活動の実践を通じた「気づき」や「体験的理解」を、大学における「学び」や「研究」に還元する帰納的な学習プロセスは、本学の理念である「優れたQOLサポーターの育成」にとって有効であると思われる。

今後については、学生が4年間を通じて「優れたQOLサポーター」に求められる質的課題を達成するためのカリキュラム（例えば、サービスマーケティングの手法を活用した帰納的学習プログラム等）の導入を検討する必要がある。

## Ⅶ. おわりに

5か月間を振り返って、心に強く残ることの中から3つを紹介したい。

1つ目は、3月の寒い日。本学の女子学生が、避難所の廊下の長椅子で小学5～6年の女兒を膝に乗せ、後ろから両手でしっかりと抱き締めていたこと。その女兒の寂しさや辛さを全身で受け止め、その子が「もういいよ」という

まで何時間でも抱き続けようとする強い意思と優しさを感じ、学生が同じ場所で同じ時間を共に過ごすことの大切さを再認識させられた。

2つ目は、「ボランティアの世界」の授業で避難生活をしている人をゲストスピーカーに招いた日。学生は、想像を絶する現実に対し胸が締めつけられるほどの衝撃を受けながらも、一瞬にして失ってしまう「家族や友人」や「当たり前の生活」の大切さに気づき、語られる言葉や笑顔に嬉しさを感じ、心を傾けて一生懸命に聴くことを体験的に理解したこと。他者の辛さや喜びを自己の辛さや喜びとすることで相互にエンパワメントできることを再認識させられた。

3つ目は、いかに大災害の被災者や避難者であったとしても、その被災者や避難者を一括りにして捉えるのではなく、一人一人の尊厳と人権を保持する支援を実現することの大切さを学んだこと。北区の避難所は、避難者が起居する生活の場に関係者以外（報道機関を含む）の立入りを制限し、生活の場と余暇的なサービス（演奏や踊りなど）の場を分離した避難所である。たとえ、災害時であっても、常に生活者の尊厳と人権の保持に努めなければならないことを再認識させられた。

東日本大震災における本学の学生によるボランティア活動の実際と評価が、今後の学生ボランティア活動の一道標となれば幸いである。

新潟日報2011年 5月13日付



## 震災体験 涙を誘う

新潟医療福祉大 避難者が講話

東日本大震災で福島県南相馬市の会社員鈴木英幸さん(34)は、交際していた女性が津波に巻き込まれた。1週間後医療福祉大で被災体験や避難生活を語った。講義の一環として、大学が招き、学生ら約400人が参加した。

浪江町の原中いつ子さん(60)は「福島県内の避難所は電気も食べ物もなく、寒くて寝られなかった。豊栄に来て温かい食事が出てありがたい」と振り返った。

避難者の語る状況を聞き、涙を流す学生もいた。代表してお礼のあいさつをした1年生の込山優さん(19)は「想像を絶する経験に何と云えばいいかわからない」と話した。

学生らに震災の体験を語る避難者12日、新潟市北区



## 注

- 1) 開学当時の旧カリキュラムの授業科目名は、「ボランティア論」（1年次・1単位・選択）である。
- 2) 学生委員会が実施する学生アンケートでは、ボランティア活動を行っている学生は全体の約5割に上っている。
- 3) 本部長は学長とし、副学長、大学院研究科長、学生部長、健康管理センター長、教務委員長、事務局長、事務局総務課長、事務局教務課長によって構成された。
- 4) 新潟県内の自治体や関係団体からの依頼は、新潟市北区避難所のみであった。
- 5) センター長は地域連携担当副学長とし、学生部長、学友会長、学生ボランティアセンター代表、レクア、コム部代表、事務局次長、事務局総務課職員、事務局教務課職員によって構成された。
- 6) ボランティア等を通して地域貢献活動を行う学生団体（部員数270人）で、児童の放課後支援、特別支援教育学校の休日支援、地域のまちづくり支援等の幅広い活動を行っている。
- 7) 北区避難所は新潟市北区が設置し、開設期間は平成23年3月18日から同年8月28日までの164日間である。この間の延べ利用者数は10,069人（8月28日現在）で、ピーク時は236人（3月24日）であった。

また、利用者の年齢構成は、0～20歳未満が117人（34.0%）、20～64歳が191人（55.2%）、65歳以上が36人（4.1%）、最高齢は93歳であり、市町村別では、福島県相馬市が149人（43.3%）と最も多く、次いで、いわき市79人（23.0%）、相馬市24人（7.0%）、波江町24人（7.0%）、郡山市23人（6.7%）の順であった。

なお、ボランティアの受付・登録・連絡調整・活動のコーディネート等に関する業務は北区社会福祉協議会が統括し、新潟市北区と一体的な運営に当たった。
- 8) 北区避難所におけるボランティアの延べ活動人数は964人（平成23年8月22日現在）であった。なお、この活動人数には団体による炊き出しやイベント、地域住民との懇親会等の活動に参加した人数も含まれている。
- 9) 完成年度を迎えるまでは、学生数の7～8割が履修している状況であった。